

二〇〇一年二月一八日

聖なるものであること(二八)

創世記二章四節～一四節

今日は、これまでお話ししてきました創世記二章七節に、

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

と記されていることを復習しながら、さらにお話を進めていきたいと思えます。

最初の部分では、

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、
と言われていますが、ここでは、神である主が「陶器師」の表象で表わされています。これによって、神である主が、ご自身の目的に沿って「人」をデザインし、ご自身の技巧を傾けてお造りになったことが示されています。さらに、このようにして形造られた「人」は、神さまの御手のうちにある器であることが示されています。

このことは、イエス・キリストにある再創造の御業にあずかっている私たちのことを述べるエペソ人への手紙二章一〇節に受け継がれています。ここでは、
私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。

と言われています。

*

「人」が「土地のちり」を素材として造られたということは、「人」と「土地」が緊密に結びついていることを示しています。そのことは、さらに、ヘブル語の原文では、「人」(ハーパーダム)と「土地」(ハーパーマー)という二つの言葉の間に語呂合わせがあることによっても、印象的に示されています。

これは、先週もお話ししましたように、「神のかたち」に造られている人間に委ねられている「歴史と文化を造る使命」を理解するうえで大切なことです。

「歴史と文化を造る使命」のことは一章二八節に、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」
と記されています。

「人」は神さまがお造りになったこの世界に置かれた「神のかたち」として、目で見ることができない神さまを代表して「地を従え」、「海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配」する使命を委ねられているのです。

これは、神さまを代表することですから、当然、その働きをとおして神さまが映し出されるようにして、あかしされなければなりません。お造りになった一つ一つのものの上に注がれている神さまの愛といつくしみを具体的なかたちで現わし、あかしするものでなければなりません。

「ご自身の無限の豊かさのうちにまったく充足しておられる神さまは、ご自身の豊かさをもってこの世界のすべてのものを満たしてください。それによって、神さまによって造られた一つ一つのものが、それぞれの特性を發揮してこの世界に存在しています。」

そのような中で、「神のかたち」に造られている人間は、神さまによって造られ、神さまの豊かさによって満たされている一つ一つのものの特性を見出し、それをより豊かなものへと「よくみ育てていく使命を委ねられているわけです。」

ですから、それは、造り主である神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまっている人間の考える「支配」ではありません。自分たちに委ねられているものの上に立って、力づくで押さえつけ、それらを搾取するというようなものではなく、今日の言葉で言えば、それらに「仕えること」に当たります。イエス・キリストが、ご自身の十字架の死による贖いの御業をとおして本来の姿を回復してくださった私たちの間で、「支配すること」の特質について、

あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。

マルコの福音書一〇章四二節～四五節

と教えてくださいとあります。

そのことの最初の現われは、創世記二章一九節で、

神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。と言われていますように、すべての生き物に名を付けることでした。

聖書の中では、名を付けることは、名を付けたものが名を付けられたもの上に権威を持っていることを意味しています。それで、「人」がすべての生き物に名を付けたことは、「人」がすべての生き物との関係を確立し、それを治めるようになったことを意味しています。

また、聖書の中では、このようにして付けられた名は、その名をもつもの本質や特性を表わします。ですから、この時、「人」はすべての生き物の本質と特性を観察して、それぞれにふさわしい名を付けたのです。

このようにして、「人」は、自分に委ねられている「歴史と文化を造る使命」にしたがって、すべての生き物たちを支配する立場に立ち、実際に支配し始めました。

このことを記す記事の中でも、
神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき
と言われています。

この「土から」の「土」は、「人」が「土地のちり」で形造られたと言われているときの「土地」と同じ言葉（ハーアダーマー）です。ですから、「人」も生き物たちも同じく「土」から出たものとして、生き物たちとの「一体性」の中にあります。「人」はそのような自覚のもとにへりくだって、生き物たちを支配していたと考えられます。そのようにして初めて、「自身を「陶器師」の表象をもって示してくださいるほどに身を低くして、「人」に向き合ってくださいった神である主のお姿を映し出すことができます。

*

「人」が「土地のちり」で形造られたということのかかわりで、創世記三章一九節に記されていることを見てみましょう。そこには、

あなたは、顔に汗を流して糧を得、

ついに、あなたは土に帰る。

あなたはそこから取られたのだから。

あなたはちりだから、
ちりに帰らなければならぬ。
と記されています。

これは、神である主の御前に罪を犯して墮落してしまったアダムに対するさばきの言葉です。ここでは、

ついに、あなたは土に帰る。

と書かれています。この「土」は、二章七節で、

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、

と書かれています。この「土地」と同じ言葉（ハーアダーマー）です。また、

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。

と書かれています。この「ちり」も、二章七節の「土地のちり」の「ちり」と同じ言葉（アーファール）です。

このことから、三章一九節の、

ついに、あなたは土に帰る。

あなたはそこから取られたのだから。

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。

ということは、「土地のちり」で造られたものが、「土地のちり」に帰るといふことを述べているのであって、どうしてこれがさばきの言葉なのかというようないふがましいです。

これについては、前にお話ししたことがあります。陶芸の名人が土くれを練り、見事な陶器に形造ったとします。その陶器は、土くれからできたものですが、もはや土くれではありません。同じように、最初の「人」は「土地のちり」をもって形造られました。それによって「神のかたち」としての栄光と尊厳性を担うものに造られたのです。もはや、「土地のちり」ではなくなりました。

ところが、その「人」が神である主の御前に罪を犯して墮落してしまったことによって、

ついに、あなたは土に帰る。

あなたはそこから取られたのだから。

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。

と言われるものになってしまったのです。

このことは、「人」が神である主の御前に罪を犯して墮落してしまったことによつて、「神のかたち」の栄光と尊厳性を失つてしまったことを意味しています。さらに、その結果、神である主が「人」のうちに吹き込んでくださった御霊による、主との交わりが失われてしまったということの意味しています。そのことの現われが、三節二四節で、

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

と言われています。

改めて注意したいことは、「人」は「土地のちり」をもつて形造られたから「土に帰る」のではないということ。そうではなくて、「人」は造り主である神さまに対して罪を犯して、御前に墮落してしまったので、「土に帰る」のです。「人」は「土地のちり」をもつて形造られたから「土に帰る」のだ、という考え方は、「この世界の悪の源は物質的なものである」とするギリシヤ的な考え方であつて、聖書の教えではありません。

*

少し話がそれますが、三章一九節の、

あなたは、顔に汗を流して糧を得、

ついに、あなたは土に帰る。

あなたはそこから取られたのだから。

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。

という神である主のさばきの言葉も、「陶器師」の表象で表わされた神である主が形造られた「人」のからだのことを述べています。しかし、それは、二四節で、

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

と言われていることに現われていますように、神である主とのいのちの交わりを失ってしまったという、霊的な死の現実をも含んでいます。

ということ、二章七節で、

その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を

吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

と書かれていることにおいても、「人」に神である主の息吹としての御霊が吹き込まれて、「人」が神である主とのいのちの交わりを始めたという霊的な現実も含まれているということを感じさせます。

実際に、二章八節以下の描写から分かりますように、「人」は神である主の御手によって形造られたその時から、神である主とのいのちの交わりにあずかっています。

*

これらのことを踏まえて、コリント人への手紙第一・一五章四五節〜四九節を見てみましょう、そこでは、

聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。最初にあつたのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ています。私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。

と書かれています。

ここには難しい問題がいくつもありますが、今お話ししていることと関係のあることだけを取り上げます。

まず、これは、この部分の導入を記している三五節で、

ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」

と書かれていますように、復活の「からだ」についての疑問に答える中で語られているものです。復活そのものことについては、すでに、一節〜二八節で論じられています。

四五節の、

聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、という言葉は、創世記二章七節で、

その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

と言われていることに触れるものです。

それに続く、

最後のアダムは、生かす御霊となりました。

というのは、十字架の死によって私たちの罪の贖いを成し遂げてくださり、栄光をお受けになって死者の中からよみがえられたイエス・キリストが、「生かす御霊」となられたことを述べています。

これは、御子の存在あるいは実体が御霊になってしまったということではありません。ここでは、「生かす御霊」の「生かす」（「いのちを与える」ということ、すなわち、御子イエス・キリストの「働き」のことが語られているのです。栄光をお受けになって死者の中からよみがえられた御子イエス・キリストは、御霊のまったき充滿によって、その「生かす」（ゾーオポイエオー「いのちを与える」という働きにおいて、御霊とまったく一つとなられたということ）です。イエス・キリストは地上の生涯において、御霊に満たされて贖い主としての御業をなさいました。しかし、栄光をお受けになってよみがえられた時には、さらに充滿な形で御霊に満たされておられたのです。

このことを受けて、四六節では、
最初にあつたのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。

とされていて、「最初の人アダム」のからだは「血肉のものであり、御霊のものではない」と言われています。そして、「最後のアダム」であられるイエス・キリストの復活のからだは、「御霊のもの」とであると言われているのです。

*

四七節では、さらにこの対比が説明されて、

第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

とされています。

この「土で造られた者」と訳されている言葉（コイコス）は形容詞で、性質（特質）を表わしています。この言葉の名詞の形（クース）は、旧約聖書のギリシャ語訳である七十人訳の創世記二章七節で、「土地のちり」の「ちり」の訳語に当てられています。

それで、

第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、

という部分は、（いろいろなることを「…的」と言って表わす）今風に直訳

しますと、

第一の人は地から出て、ちり的です。

となります。つまり、「第一の人」アダムは「ちり的」な性質（特質）をもっているということです。

実際には、このような性質（特質）があつたために、「第一の人」は神である主の御前で罪を犯して墮落してしまいました。それで、この「ちり的」という言葉の背景には、創世記三章一九節の

あなたはちりだから、

ちりに帰らなければならぬ。

という言葉もあつて、罪による墮落の事実も含まれていると考えられます。

そうしますと、これとの対比で記されている、

第二の人は天から出た者です。

ということでは、その後、「ちり的」に対比される「天的」ということが省略されていると考えられます。それを補えば、

第二の人は天から出て、天的です。

となります。

事実、続く四八節で、

土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。

と言われているときの「土で造られた者」は「ちり的」という言葉（コイコス）によつて表わされており、「天からの者」と「天から出た者」は、その「天的」（エプウーラニオス）という言葉で表わされています。（どちらも、形容詞に冠詞を付けて実体化しています）

「土で造られた者はみな」の「土で造られた者」は複数で、アダムをかしらとするすべての人を指しています。「この土で造られた者に似ており」の「土で造られた者」は単数で、最初の人アダムのことです。「天からの者はみな」の「天からの者」は複数形で、コリントの信徒を初めとする主の民のことです。そして、「この天から出た者に似ているのです。」の「天から出た者」は単数で、栄光のうちによみがえられた御子イエス・キリストのことです。

「こちゃこちゃ言いましたが、ここでは、「第一の人」アダムが「地」に属しており、「ちり的」であることと、「第二の人」イエス・キリストが「天」に属しており、「天的」であることが対比されているのです。

*

その上で、四九節で、

私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。

と言われています。

後半の、

天上のかたちをも持つのです。

という訳は大切なことを見失わせてしまいます。

これをこれまで使ってきた言葉で訳しますと、

私たちは、ちり的な者のかたちを持っていたように、天的な者のかたちを持つようになるのです。

となります。

この「天的な者のかたち」は、栄光のうちによみがえられたイエス・キリストのかたちのことです。これを「天上のかたち」と訳しますと、栄光のうちによみがえられたイエス・キリストのかたちが見失われてしまいます。

ここでは特に復活のからだのことが問題となつていきますから、これは、コリント人への手紙第二・三章一八節で、

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

と言われていることが、私たちの肉体と靈魂のすべてにおいて完成することを述べています。

それは、ローマ人への手紙八章二八節〜三〇節で、

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

と言われている、父なる神さまの「永遠のみこころ」が、完全に実現することでもあります。

今、私たちは、この完成への途上にあります。しかし、それは、私たちだけのことではありません。これまでお話ししてきましたように、「神のかたち」に造られている人間に委ねられた「歴史と文化を造る使命」は、委ねられた「地」やすべての生き物たちとの「一体性」において遂行していくべきものでした。この「一体性」のために、人間が造り主である神さまに対して罪を犯して墮落した結果、「土地」を初めとしてこの世界のすべてのものが虚無に服することになりました。創世記三章一七節で、

あなたが、妻の声に聞き従い、

食べてはならないと

わたしが命じておいた木から食べたので、

土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。

と言われているとおりです。

同時に、この「一体性」のために、コリント人への手紙第一・一五章四九節で、

私たちは、ちり的な者のかたちを持っていたように、天的な者のかたちを持つようになるのです。

と言われていることが実現する時には、「神のかたち」に造られている人間に委ねられているすべてのものが、「天的」な栄光にあずかるようになります。

ローマ人への手紙八章一九節〜二三節で、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいます。

それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

と言われているとおりです。

これまでお話ししてきたことのかかわりで言いますと、これらすべてのことは、神さまが天地創造の第七日を祝福し聖別してくださったことの中で起こっています。

そして、そのことの完成の途上にある私たちは、「私たちのからだの贖われる」日、すなわち、御子イエス・キリストの再臨の日に私たちが復活の栄光にあずかるとともに、新しい天と新しい地が完成することを待ち望んでいます。